第２群の座長をつとめて

山　下　摩利子
（石川県済生会金沢病院）

第18回石川県看護研究会学術集会，第２群の座長を務めさせていただきました。第２群は一般演題４題の発表でした。研究の対象は，患者さんのみならず，ご家族や看護師自身と幅広いものでした。このことは，看護職の抱える課題の幅広さを象徴していると感じました。さらに，石川県の看護の現場にはこの地ならではの多くの研究テーマが存在していることも教えられました。

第１席の金沢大学医学部附属病院の谷村由紀子さんの発表は，化学療法を受けている患者さんに少しでも多く食事摂取していただけるように援助したいという目的から取り組まれた研究でした。前回の研究結果をふまえて，栄養部とのタイアップも図られ，まさに現場のチーム医療を研究的に評価されたものでした。「治療中の患者にとって食事についての話題は苦痛であり，食事介入は患者の希望する治療開始４～５日目がよいと思われる。」という結果は，他施設での看護実践においてもとても参考になります。御講評では，今後は食事介入の成果を体重の減少率・増加率といった具体的なデータで示す方法の検討が必要とのご指摘でした。

第２席の辰口芳珠記念病院の谷典子さんの発表は，脆弱性骨折の女性患者さんが退院後の生活にどんな不安を抱えているのかを明らかにすることを試みたものでした。一人ひとりの患者さんの生活背景や社会的役割と「不安」との関係が考察されていました。御講評では，研究の視点を「不安」という大きな枠組みよりも「退院後の生活の何に困難を感じているか」に絞った方が，結果を具体的な看護援助につなげられるのではないかとのご指摘がありました。また，会場からは対象者の年齢層が60～80代と幅広く，発達段階によって不安の内容に差異があったのではないかとの質問もありました。今後は研究対象の選定方法やデータ分析方法をさらに吟味されることで，より実践的な研究成果が得られることが期待されます。

第３席の石川県立中央病院の牧千珠子さんの発表は，救急入院患者さんのご家族のニーズに応えたいとの思いから取り組まれた研究でした。先行研究の成果に基づいて，臨床現場の実態を検証することができました。この結果は，私を含めて救急入院患者さんにかかわる一人ひとりの看護師に，家族看護の重要性・必要性を認識させ得るものと思います。

第４席の公立加賀中央病院の方橋美智子さんの発表は，「多忙な臨床看護師が楽しく前向きに研究に取り組むためには」という永遠のテーマに挑んだ内容でした。今回の学術集会のテーマにも相応しく時機を得た研究でした。研究活動を経験することで看護師の意識に前向きな変化がみられたとまとめられています。しかし，結果を項目別・役割別に細かくみると意識の変化やその時期に違いが読み取れます。御講評ではその原因を深く掘り下げていくことが必要だとのご指摘でした。座長として，会場の師長さんはじめ，スタッフ育成を担っている方々から，何かご意見や各施設の現状報告を載けるとよかったなと少々残念な思いがいたしました。

最後に，研究者の皆様のご努力にあらためて敬意を表します。皆様のさらなるご活躍をお祈りいたします。質疑応答では質問が少なく，研究者の皆様にはせっかくの発表の機会を十分に活用していただくことができず，会場の皆様との橋渡し役としての力不足をお詫び申し上げます。そして，今回座長という貴重な経験の機会を与えてくださった方々に心から感謝申し上げます。